第5篇　絶対的剰余価値および相対的剰余

価値の生産

第15章　労働力の価格と剰余価値との大

きさの変動

賃金とは貨幣で支払われる労働者へ

の報酬である。「価格」という言葉がで

てくるが、後で賃金の話に引き継がれ

ていく。

まず、「労働力の価値」は労働者が生

活するのに必要な生活手段の価値であ

る。単にいまを生きるために必要とい

うだけでなく、子育て、技術取得など文

化的な必要などを全部含めた価値であ

る。おさらいである。

（労働力の価値）「中見出し」は浜林

p.903　生活諸手段の総量は、その形態が変動することはあっても、一定の社会の一定の時代には与えられており、したがって不変の大きさとして取り扱うことができる。

　変動するのはこの総量の価値である。

「生活手段の量」：時代とともに変化

する。「一定の社会の一定の時代には与

えられている」ので「不変の大きさ」と

して扱われる。

p.904　（1）商品はその価値どおりに売られる。（2）労働力の価格はときにはその価値よりも高く売られることはあっても、その価値よりも低くなることはない。

男女、成年が未成年かなど「自然的相

違」はここでは考慮しない。

「低くなることはない」：労働力の価

格が価値以上であっても、搾取つまり

剰余価値の生産は行われていることを強

調している。

（三つの要素）

p.904　労働の価格と剰余価値との相対的な大きさは、

（1）労働日の長さ

（2）労働の標準的強度

（3）労働の生産力

の3つの事情によって制約されていることがわかった。

‥‥以下においてその主要な組み合わせだけを述べる。

（労働の生産力が上がる場合）

〔第1節〕p.904　労働日の大きさおよび労働の強度が不変で労働の生産力が可変である場合‥この前提のもとでは、労働力の価値と剰余価値とは、3つの法則によって規定されている。

|  |
| --- |
| 〔第1節〕 |
| 労働日の長さ（外延的大きさ） | 労働の強度（内包的大きさ９ | 労働の生産力（生産諸条件の違い） |
| 不変 | 不変 | 可変 |
| 生産力が可変なので全体としては上がる方向。３つの法則により規定されている。 |
| 第1法則－労働の生産性が上がれば、生産物の量は増えるが、価値は同じである。p.905　つねに同じ価値生産物で表される。生産物が10個しかできなかったが20個になれば、総量は増えるが、価値としては同じ。つまり、同じ労働時間で生産されている。 |
| 第2法則－p.905　労働力の価値と剰余価値とは互いに反対の方向に変動する。労働力の価値が下がれば、剰余価値は増える。労働力の価値が上がれば剰余価値は減ると言っている。ただし、同じ比率で変動するわけではない。賃金（v）＝必要労働時間＝労働力の価値は4シリングから3シリングに下がる。比率は－25%。剰余価値（ｍ）は2シリングから3シリングに上がる。比率では＋50％である。　　 |
| 第3法則－p.907　第3に。剰余価値の増加または減少は、つねに労働力の価値のそれに照応する減少または増加の結果であって、決してその原因ではない。 |

p.907　…剰余価値の大きさは、どの場合でも労働力の価値の大きさの逆の変動から生じるということになる。

p.906　すなわち、労働の生産性の増加は、労働力の価値を低落させ、したがってまた剰余価値を上昇させるが、他方では、逆に、生産性の減少は、労働力の価値を上昇させ、剰余価値を低落させる。

p.907　諸事情がこの法則の作用を許す場合であっても、中間的諸運動が起こりうる。

労働の生産力が高められた結果、労

働力の価値が低下しても、労働力の価

格はいっぺんに下がるわけではない。

これは賃金が価値以上に高いというこ

とである。

p.907　一方の側からの資本の圧力が、他方の側から労働者の抵抗が、天秤皿に投げ入れる相対的重量となる。

どこまで下がるかは、労使間の力関

係による。下がる場合、価値よりも価格

の方が、下がり方が遅い。

p.909　したがって労働者の生活状態と資本家の生活状態のあいだの隔たりは拡大されるであろう。

相対的貧困化論。

〔第2節〕p.911　労働日の労働と生産力とが不変で労働の強度が可変である場合

（労働強化）p.911　‥‥生産物は依然として同量の労働を費やすので、個々の生産物の価値は、不変のままである。この場合には、生産物の数は増加するが、生産物の価格は低下しない。

|  |
| --- |
| 〔第2節〕 |
| 労働日の長さ（外延的大きさ） | 労働の強度（内包的大きさ） | 労働の生産力（生産諸条件の違い） |
| 不変 | 可変 | 不変 |
| 働く時間は同じで、労働の強度が強くなるので生産物の量は増える。 |
| 強度が大きいので、貨幣に換算する場合はより高い貨幣価値をもつようになる。.912　強度のより大きい12時間労働は、通常の強度の12時間労働日のように6シリングではなく、7シリング、8シリングなどで表される。 |

（労働力の消耗）

p.912　逆に、労働力の価格の騰貴が、労働力の価値の低下をともなうことがありうる。労働力の価格の騰貴が、労働力の速められた消耗をつぐなわない場合には、このことはいつでも起こる。

労働者が30年働けるとする。労働力

の価値は、働き始めるまで20年くらい

を含んで、50年生きる。それだけの生

活手段の価値を30で割ったものが労働

力の価値ということになる。

労働力の消耗が激しい。50歳まで生

きられず、30年は働けない。労働力

の価値はむしろ非常に高くなってし

まう。

　賃金が多少高くても、若く過労死

すれば、労働力の価値をつぐなった

ことにはならない。こうした場合は、

労働力の価格が上がっても、それは

価値以下にしかなっていないとする。

p.912　労働の強度がすべての産業部門において同時にまた同じ程度に増加すれば、この新しいより高い強度は通常の社会的標準となり、したがって、外延的に大きさとして数えられなくなるであろう。

一企業が労働を行う。その企業は多

くを生産し、特別のもうけを手に入れ

る。社会全体にいきわたると、もうけは

なくなる。みんなが同じような強度で

働くようになると、それが平均になる。

そうすると生産力が上がったのと同じ

ことになる。

労働強化が強まる場合は、相対的剰

余価値が生産されている－学会の結論。

（労働力の価格と剰余価値が同時に増える）

〔第3節〕p.913　労働の生産力と強度とが不変で労働日が可変である場合

|  |  |  |
| --- | --- | --- |
| 〔第3節〕 |  |  |
| 労働日の長さ（外延的大きさ） | 労働の強度（内包的大きさ） | 労働の生産力（生産諸条件の違い） |
| 可変 | 不変 | 不変 |
| 絶対的剰余価値の生産である。 |
| 1. 労働日が短縮されれば絶対的剰余価値は減る。
2. 逆に長くなれば、絶対的剰余価値は増える。
3. 労働日が延長されると、消耗度が激しくなり、労働力の価格、つまり賃金が上がっても消耗度をつぐなうことができない場合がある。その場合、価格は上がっても労働力の価値以下になる。
 |

〔第4節〕p.916　労働の持続、生産力、および強度が同時に変動する場合

（三つの組合せ）

‥ここでは、われわれは、二つの重要な場合について、簡単に注意するだけにとどめる。（一）労働の生産力が減少し、同時に労働日が延長される場合

p.219　（二）労働の強度と生産力が増加し、同時に労働日が短縮される場合

|  |
| --- |
| 〔第4節〕 |
| 労働の持続（外延的大きさ） | 労働の強度（内包的大きさ） | 労働の生産力（生産諸条件の違い） |
| 可変 | 可変 | 可変 |
| 3つが同時に変動する。組合せはいっぱいあるが、p.916　二つの重要な場合について、簡単に注意するだけにとどめる。 |
| 1. P.916　労働の生産力が減少し、同時に労働日が延長される場合。つまり剰余価値が減る方向と増える方向の同時に働く。トータルは両方の程度による。
2. P.919　労働の強度と生産力が増加し、同時に労働日が短縮される場合。労働の強度と生産力の増加は剰余価値増えるが、労働日の短縮は剰余価値がへる。トータルはバランスによる。
 |

p.919　全労働日がそこまで収縮するならば、剰余労働が消滅するであろうが、このようなことは資本の支配体制のもとでは不可能である。資本主義的生産形態が廃止されれば、労働日は必要労働に限定することが可能となる。

労働日が必要労働時間分まで短縮さ

れたら剰余価値は消滅する。

（社会主義のもとでの労働）

p.920　必要労働に、すなわち社会的な予備元本および蓄積元本を獲得するのに必要な労働に、算入されるであろう。

必要労働に算入されるだろう。

p.920　したがって、諸個人の自由な精神的および社会的な活動のために獲得される時間部分がそれだけ大きくなる。

　労働日短縮のための絶対的限界は、この面からすれば、労働の普遍性である。

「労働の普遍性」：みんなが働くとい

う意味。資本主義社会では遊んでいる

階級がいる。

　マルクスは、生産力が拡大すると労

働日が短縮される。資本主義のもとで

のムダな労働がなくなれば生産性が高

まると考えていた。

p.920　資本主義社会においては、一階級の自由な時間は、大衆のすべての生活時間を労働時間へ転化することによって生み出される。

労働強化－同じ時間内に2倍の労働が支出され、そこで生産される価値総額も2倍になる。

生産性の上昇－支出される労働の量は変わらず、しかも生産額は2倍になるということ。